

たのは、商売が生活の支えそのものであったからでもあります。けれども、何よりも町に少しでも活気が戻るようにとの願いを込めてのものでした。

そのネーミングと外観から、町内のみならず熊本本の復旧・復興のシンボルとなった屋台村には、全国各地から多くの人が訪れました。芸能人や自治体の首長、災害がれき撤去やその他のボランティア活動で訪れた人、視察で訪れた人など、屋台村がなければ、もしかして一生会わなかったかもしれない、本当に多種多様な人の出会いの場となりました。



④復興市場・屋台村はこの大きなテントで営業していました  
 ⑤閉鎖と聞き、多くの人が駆けつけました ⑥復興メッセージボードにびっしりと書き込まれた応援の言葉

張り目なんです。9月末の時点で、延べ25万人と、本当に多くの人に来てくださった」と懐かしそうに振り返るのは一般社団法人・まちづくり益城事務局の尾方克徳さん。尾方さんは熊本市内に住んでいます。尾方さんに応援を頼まれ、事務局としてお手伝いをしてきました。

屋台村は、復旧・復興のシンボルとしてだけでなく、多くの絆やつながりを生んだ場所でもありました。今回、閉鎖となるのは、被災して営業を休止していたスパーが、店舗再建の準備に入るためです。この日訪れた人にインタビューす

ると、「出店されているお店は、どれも馴染みのあるお店です。そのうちの一つは家から近いこともあり、震災前からよく利用していました。何かお祝い事のお店に行ったり、鉢盛りを頼んだりしていました。そのお店がなくなると話聞いて、最後にと、今日は来ました」と名残惜しそうに話しました。

閉鎖に伴い、お店を新たに構え営業を続ける人、これをきっかけに営業自体を辞めてしまう人、まだこれからのプランを立てることができない人、その状況はさまざまです。

閉鎖後は、新たな場所で営業をすることが決まっている「お茶の富澤」の富澤典子さんは、「これからは、屋台村の皆さんとはバラバラになっけてしまい寂しい気持ちです。経済面で不安を感じたり、無くなったものもたくさんあるけれど、いただいたものもたくさんあります。個人個人の復興を成し遂げるために、利益ではなく、ここで得た絆やつながりを通し、前向きに頑張っていきたい」と話しました。

震災前は、町役場の前やその他の場所でも、お弁当などの移動販売を精力的に行っていた「歌蔵」の藤森里美さんは、「寂しくて涙が出ます。昨日もわざわざ熊本市内から来られたお客さんに、お弁当を買っていただきました。また頑張る移動販売などをやっていきたいです」と話し



⑦決意を話した富澤さん ⑧熊本ロータリークラブから事務局に義援金の贈呈  
 ⑨⑩屋台村の中には、至るところに感謝の言葉が掲げられていました

ました。多くの人が訪れ、店の人々が一杯駆け抜けた1年4か月。数々の出会いと思いを抱き、10月いっぱいをもって、『益城復興市場・屋台村』は惜しまれながら幕を閉じます。形はなくなっていますが、人々の心のどこかに生き続け、いつの日にか町が完全な復興を遂げたとき、懐かしく思い出されることでしょう。ありがとう屋台村。